



のような膨大な証言は有用であろう。私のとったアプローチは緊張感をほらむものの、これまで語られてきた方法に欠けている視点を照らし出すことができると考えている。

偉大な歴史家サロー・パロンが一九世紀のユダヤ人による歴史記述の傾向を見事に批判した言葉を借りて、本書は、パレスチナの二〇〇年の歴史に関する「お涙頂戴史観」に該当するものではないと付け加えておき

たい。パレスチナ人は、抑圧者側に同調する人びとから、被害者意識に浸っていると批判されてきた。しかし、植民地戦争に立ち向かった他の先住民と同様に、パレスチナ人も氣力を挫かれるような如何ともしがたい困難に直面してきたことは事実である。また、度重なる敗北を経験し、しばしば分裂したり誤った政治指導も受けてきた。パレスチナ人はそうした不利な状況をうまく覆したり、よりよい選択を下したりすることができたかもしれない。しかし、それでもパレスチナ人に立ちほだかった国際的、帝国主義的な強大な力を見逃すことはできない。その規模は無視されてきたが、それでもパレスチナ人は驚くべき回復力を示してきた。本書が、こうしたレジリエンスを反映し、歴史的パレスチナとそれにまつわる物語をも支配する人びとが歴史から抹消してしまったものを回復する一助となるよう願っている。

ッタ地区。占領当  
パレスチナ人約  
の家屋破壊を阻む  
ダルウィーシュの  
が描かれている

The Hundred Years' War on Palestine

# パレスチナ戦争

入植者植民地主義と抵抗の百年史

Rashid Khalidi

ラシード・ハーリデー [著]

鈴木啓之・山本健介・金城美幸 [訳]



◎——カバー写真

占領下ヨルダン川西岸南部マサーフェルヤッタ地区。占領当局が同地区の大部分を軍事閉鎖地域とし、パレスチナ人約1150人が民族浄化の危機にある。一帯での家屋破壊を阻むため地元民らが常駐する小屋にマフムード・ダルウィーシュの詩の一節（「私たちには生きる価値がある」）が描かれている（2022年11月20日、金城美幸撮影）。